

「モダン」女性像の流行

—大正末から昭和初期の同時代女性像の考察—

矢頭 英理子（京都大学大学院）

大正末期から昭和初期にかけて、日本画では、同時代の女性を描いた作品が増加した。明治 40（1907）年に開設された文部省美術展覧会では、初期から平安朝の女性や浮世絵風の女性像と共に、少数ではあるが、同時代女性に材を取ったと思われる出品されていた。しかし、大正末期から昭和初期にかけては、この種の作品数が増加し、またモダンガールを描いた作品や、スポーツをする女性を描いた作品など、題材において多様性が見られる。また、昭和 5（1930）年の田中一松による帝展評では、帝展の人气が主として風俗画に集中されていると記されており、本発表で取り上げる風俗画が当時一般の注目を集めていたことがうかがえる。

児島薫氏は、当時、帝国主義国家であった日本において豪華なファッションをまとう昭和前期の女性像は、「帝国」を飾る女性像であり、モダン都市の豊かさを享受する日本の社会を象徴するものであったと指摘している。

本発表では、大正末期から昭和初期の同時代の女性像が多く制作された背景として、女性観の変化、そして同時代の画壇における状況に関して検討を行いたい。女性観の変化に関しては、当時の婦人雑誌に掲載された記事などにより、うかがうことができる。例えば、昭和 4 年 7 月号の『婦人公論』では、「近代美人論」と題された特集が組まれ、そこでは、複数の寄稿者によって、健康、快活な女性を美しいとする意見が寄せられている。また、表情や感情、生き生きとした目に美を見出す主張も散見される。この時期、スポーツが新しい画題として浮上していること、また、柿内青葉の《十字街を行く》（昭和 5 年）などの作品において、依然として控え目ではあるが、描かれている女性に笑みのような表情が見出せることなどは、このような女性観の変化と関連があると思われる。

次に同時代の画壇における状況に関しては、仲田勝之助や鏑木清方らによって、現代性を反映した作品制作を求める意見が帝展評の中で示されている。仲田勝之助は美術評論家であると同時に浮世絵の研究者としても知られ、また鏑木清方は浮世絵の画系の出身であることは、考慮に入れる必要があるが、昭和初期において作品の題材に関して現代性を求める意見が複数見られることは注目に値するであろう。さらに、鏑木清方は、昭和 6 年の帝展に出品された日本画について、現代生活に取材した作品の増加を歓迎する一方で、それらの作品における「社会性」の欠如や「近代生活の核心」に触れていないことを難じてもいる。このように、この時期においては、作品の題材に関して画家や批評家によって意識的な意見が提示された。これらの批評、さらに、個々の同時代女性を扱った作品の批評を再検討することで、作品制作の背景の一端を明らかにすることができると考える。

この他、作品の受容の問題、さらにこの時期の作品に先行する時期の作品との差異などについてもより言及を行っていきたい。